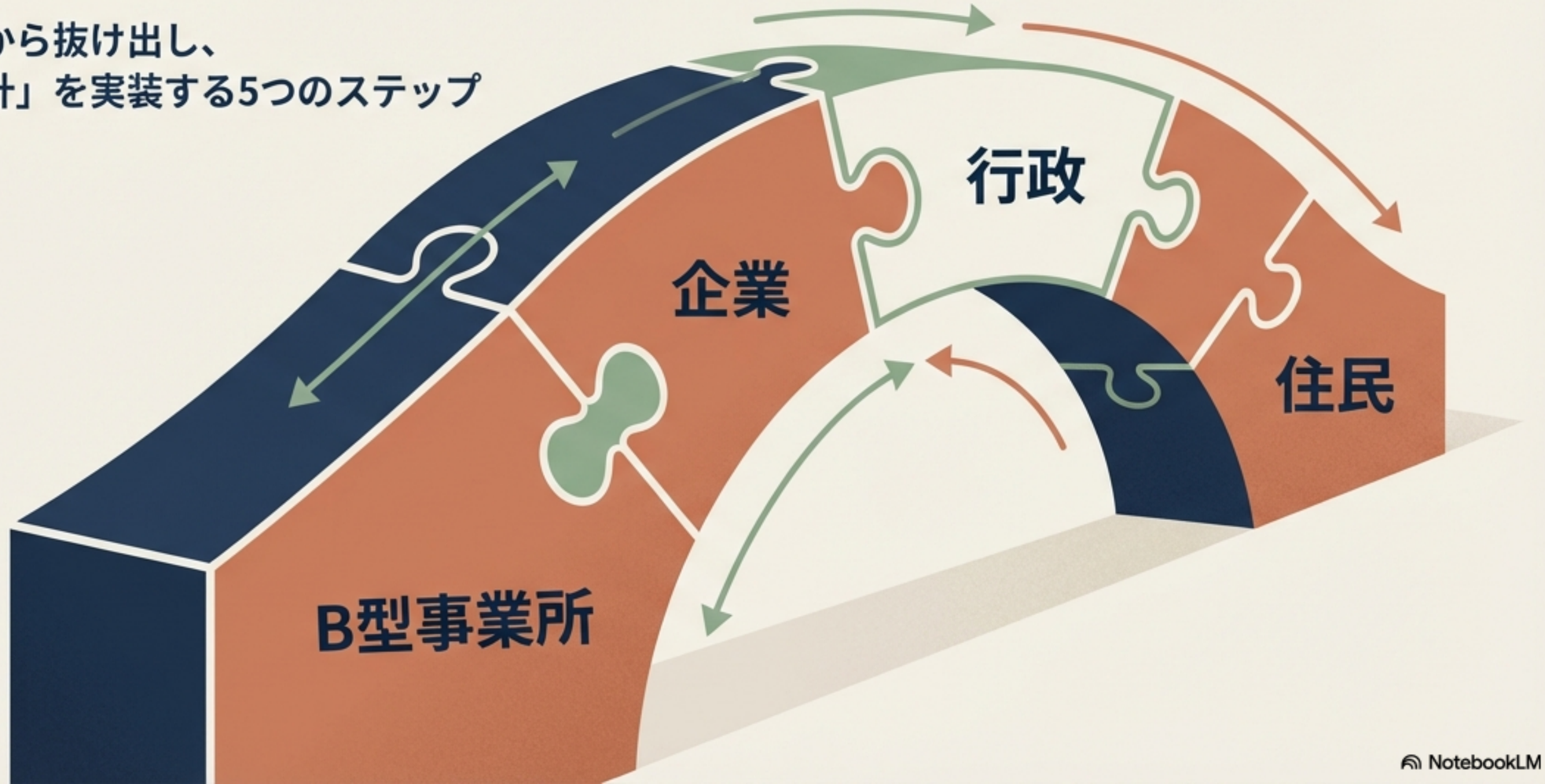
B型事業所が牽引する地域共生社会
地域共生社会

単発の「良い活動」から抜け出し、
継続可能な「協働設計」を実装する5つのステップ



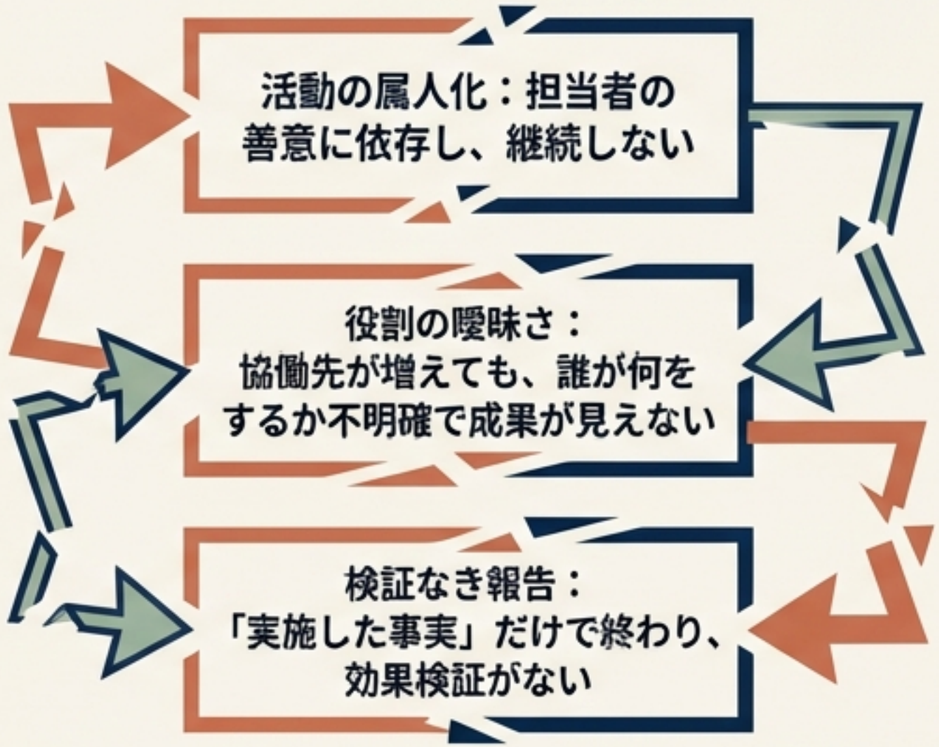
NotebookLM

現場を疲弊させる「地域共生」の現実

左側（理想）：



右側（現実の課題）：



「商店街の清掃」「学校の福祉授業」「避難訓練」…単発イベントに参加するだけでは、
利用者の役割は定着せず、地域との関係は深まりません。

NotebookLM

「善意のイベント」から「戦略的な協働設計」へ

旧来のパラダイム（単発イベント）	新しいパラダイム（継続可能な協働設計）
原動力：担当者の善意と熱意	原動力：組織的な運用システム
目的：「何かできること」を探す	目的：明確な「地域課題」の解決
評価：実施した事実（満足度）	評価：データと行動変化（KPI）

※社会福祉法（地域福祉推進）や障害者基本法が求める「地域共生」を、現場の具体的アクションへ翻訳します。

NotebookLM

ソーシャルアクション実装の5ステップ



1. 課題の特定
地域課題を3テーマに絞る

2. 役割の設計
協働先との役割分担を明文化

3. 小さく実装
3か月間の試行運用

4. 声の回収
フィードバックによる改善

5. 成果の可視化
次の連携へ接続するデータ化

規模の拡大よりも、「継続できる運用」の構築を最優先します。

NotebookLM

Step 1: 行政データと現場感で課題を3つに絞り込む



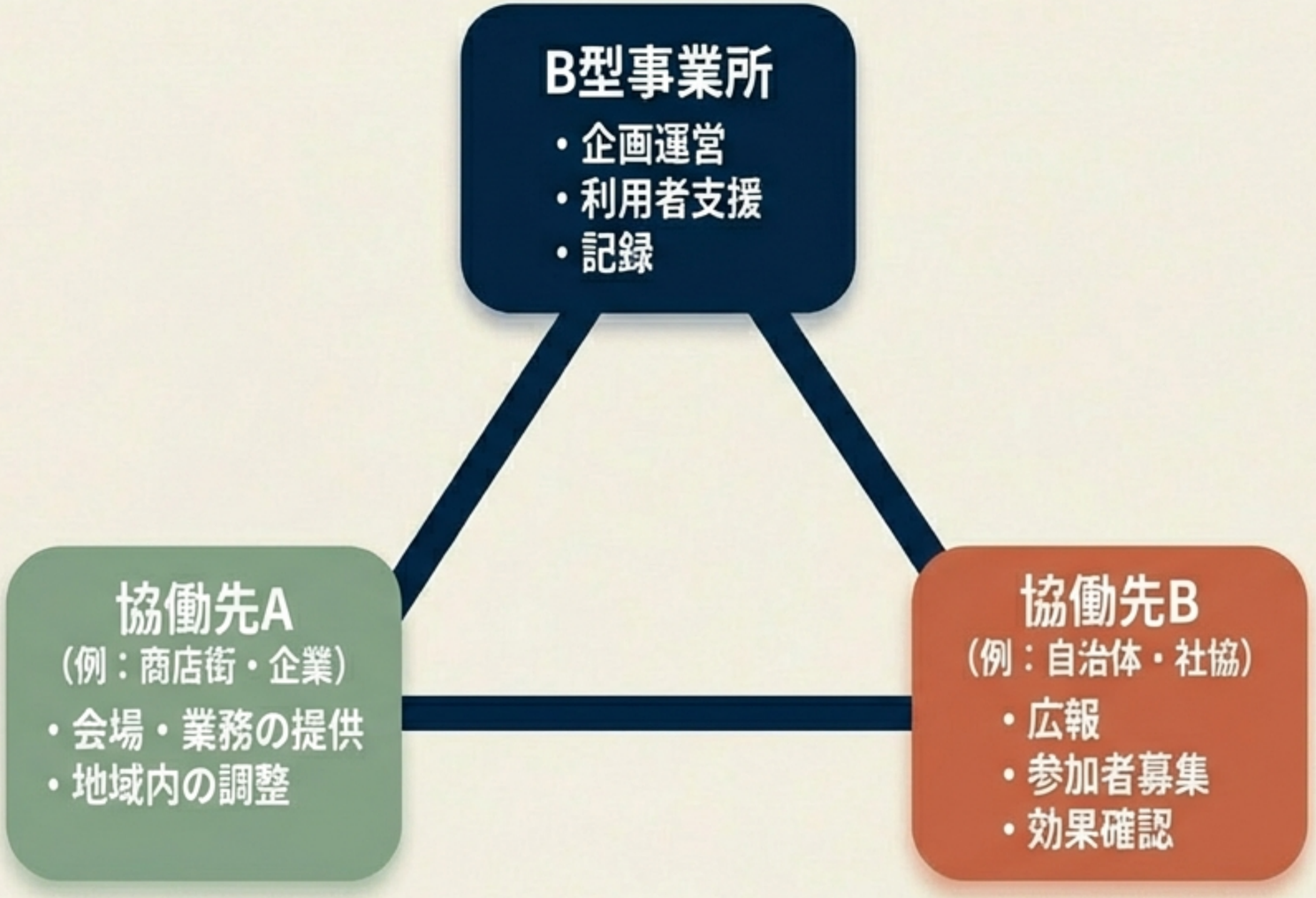
行政計画、協議会資料、
現場の相談記録

「事業所が関与できる領域」で
フィルタリング

絞り込むことで、活動が
「できること探し」から
「成果を出す活動」へ
変化します。

NotebookLM

Step 2: 多機関連携は「2〜3機関」で役割を明文化する

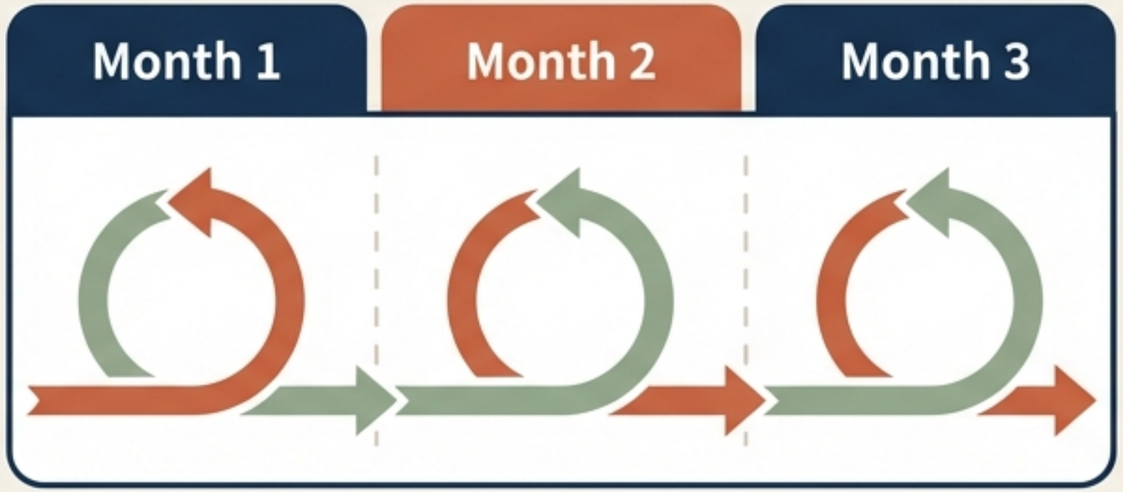


最初から関係者を広げすぎないことが鉄則です。主連携先を絞り、「誰が」「何を」「どこまで」担うかを文書化します。

NotebookLM

Step 3: 活動内容よりも「継続性」をテストする3か月試行





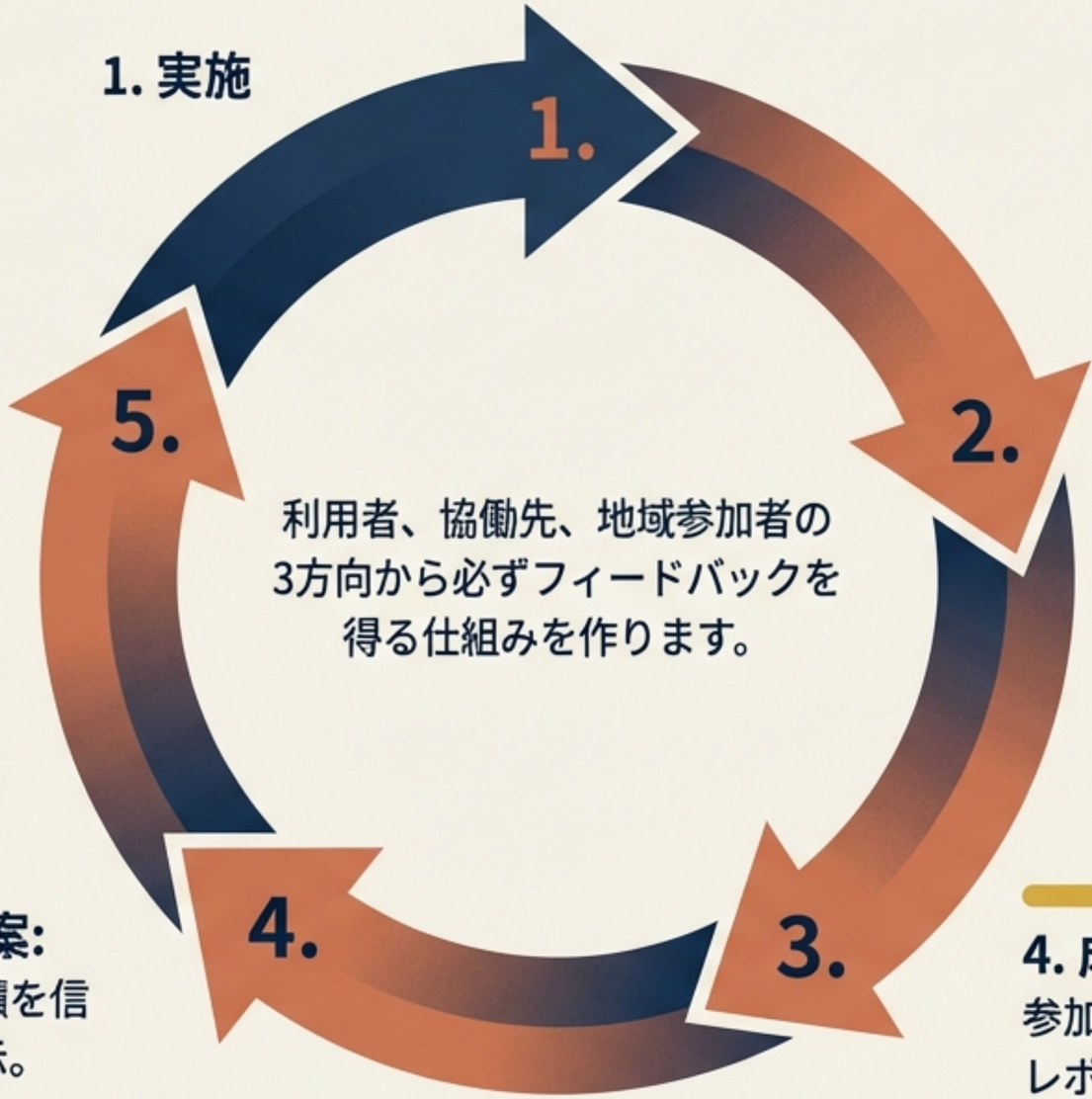
推奨されるスモールスタートの例：

- 商店街の定期軽作業を「就労機会化」する
- 地域イベントでの定期的な制作物販売
- 学校での当事者理解・対話授業（継続窓口の設置）

目的は「完璧な実施」ではなく「運用サイクルの確立」です。3か月後に継続・修正・停止を判断できる状態を目指します。

NotebookLM

Step 4 & 5: 声を回収し、次期計画へ直結させるループ



1. 実施

2. 声の回収:
単なる「満足度」だけでなく、「次回も参加したいか」「役割は明確だったたか」を短く問う。

3. 改善会議:
継続・修正・停止のジャッジ。

4. 成果の可視化:
参加人数、役割拡大件数などをレポート化。

5. 次の連携提案:
可視化された実績を信頼材料として提示。

5. 次の連携提案:
可視化された実績を信頼材料として提示。

NotebookLM

ケーススタディ：AY事業所の「関係性が深まる」変化

導入前（Before）

毎年内容が変わる地域行事への参加。「参加しているのに地域との関係が深まらない」という悩み。利用者の役割が定着せず。

アプローチ（Action）

- 課題を「就労機会」「孤立予防」に限定。
- 商店街と「週1回の軽作業」を3か月試行。
- 活動後の振り返りを定例化。

導入後（After）

- 協働先からの継続依頼率が大幅上昇。
- 連携先が1機関から3機関へ拡大。
- 利用者の地域参加頻度と自己効力感が改善。

> 「地域の中で利用者さんの表情が変わる瞬間が増えた」— AY事業所スタッフ

NotebookLM

運用の見える化：追跡すべき3つの重要KPI

地域協働継続率

→



[目標: 70%以上]

定義: 協働案件のうち次期も継続した割合（半期計測）

利用者地域参加率

→



[目標: 60%以上]

定義: 地域活動へ月1回以上参加した利用者割合（月次計測）

協働先再依頼率

→



[目標: 50%以上]

定義: 一度連携した機関から再依頼があった割合（半期計測）

Data Strategy Note
数値データと同時に「利用者の行動変化エピソード」を必ず記録し、未達の場合はテーマの縮小や対象の再設定で立て直します。

NotebookLM

運用を破綻させる「3つの罠」と回避策



罠1：目的不在のスタート

実施後に
「何のためだったか」
成果説明ができない。

→ 目的・対象・評価指標を最低限決めてから着手する。



罠2：協働先の一一気拡大

調整負荷が爆発し、
現場の運営が破綻する。

→ 最初は2〜3機関に絞り、運用が安定してから増やす。



罠3：声の無視（独りよがり）

利用者や住民の
ニーズとズレた活動を
続けてしまう。

→ どんなに短くても、毎回フィードバック回収をプロセスに組み込む。

NotebookLM

アクション開始前の品質チェックリスト

- [ ] 地域課題のテーマ（最大3つ）が明文化されているか？
- [ ] 協働先ごとの役割分担が文書化されているか？
- [ ] 活動ごとの目的・対象・期間・評価指標が設定されているか？
- [ ] 利用者・住民・協働先のフィードバック回収手順があるか？
- [ ] 成果報告が次の計画へ連動するサイクルになっているか？

事業所が地域へ一歩出ることは、利用者の選択肢を増やすことです。
小さな協働を、地域に続く仕組みへと育てていきましょう。

NotebookLM